



2011年度長尾山古墳発掘調査 現地説明会資料

2011年9月25日（日）

大阪大学考古学研究室・宝塚市教育委員会

調査の経過と目的

宝塚市山手台東1丁目にある長尾山古墳は、1957年、長尾山丘陵の分布調査の際に発見され、1969年に宝塚市教育委員会と夙川学院短期大学日本歴史研究会によって墳丘測量調査が実施されました。ただ、その後も発掘調査は行われておらず、墳丘形態や築造時期について不明な点が残されたままでした。そこで大阪大学考古学研究室は、畿内地域北西部の猪名川流域（兵庫県南東部～大阪府北西部）における古墳時代首長の盛衰を解明する研究の一環として、2007年に宝塚市教育委員会とともに長尾山古墳の発掘調査に着手し、墳丘規模・構造、築造時期などを追求してきました。昨年までの調査の結果として、次の点が明らかになりました。

- ・ **古墳の形状**は、これまで推定されてきた前方後方墳ではなく前方後円墳で、前方部、後円部ともに二段築成。墳丘には葺石を施し、埴輪列がめぐる。
- ・ **埋葬施設**は、長辺 8.9m、短辺 5.0m の隅丸方形の墓坑内に、粘土槨（長大な木棺を粘土でくるんだ施設）を構築している。粘土槨は、長さ 6.7m、幅 2.7m の巨大なもので、保存状態はきわめて良好。
- ・ **古墳の築造時期**は、出土埴輪の特徴から古墳時代前期前半（4世紀初頭）にさかのぼる。猪名川流域では最古の前方後円墳と推定。

本年度の第8次調査は、これまでの調査において課題として残されていた①粘土槨の排水施設の構造解明、②後円部北側の墳丘裾の位置確定、③墳丘周辺の地形測量の補足、の3点をおもな目的として計画しました。調査は、科学研究費補助金によるプロジェクト「21世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信」（研究代表者福永伸哉）の一環として、大阪大学考古学研究室が主体となり、宝塚市教育委員会のご協力を得て実施しています。

長尾山古墳第8次調査の概要

古墳名：長尾山古墳

（墳丘長42mの前方後円墳、4世紀初頭。宝塚市史跡）

所在地：兵庫県宝塚市山手台東1丁目

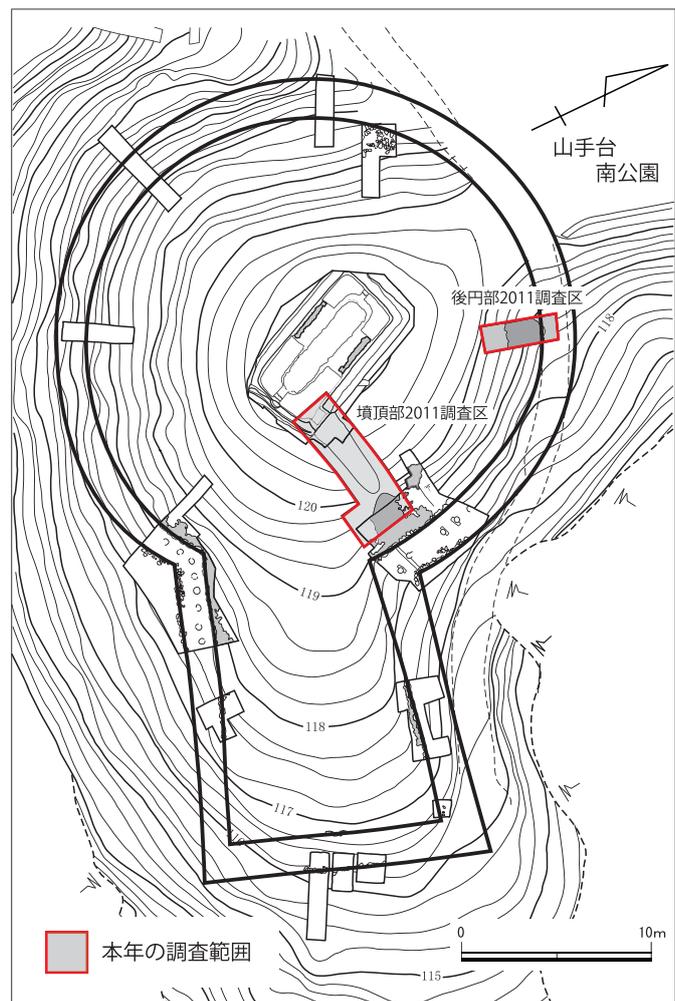
調査主体：大阪大学考古学研究室

（調査協力／宝塚市教育委員会）

調査方法：粘土槨排水施設および後円部斜面の発掘調査

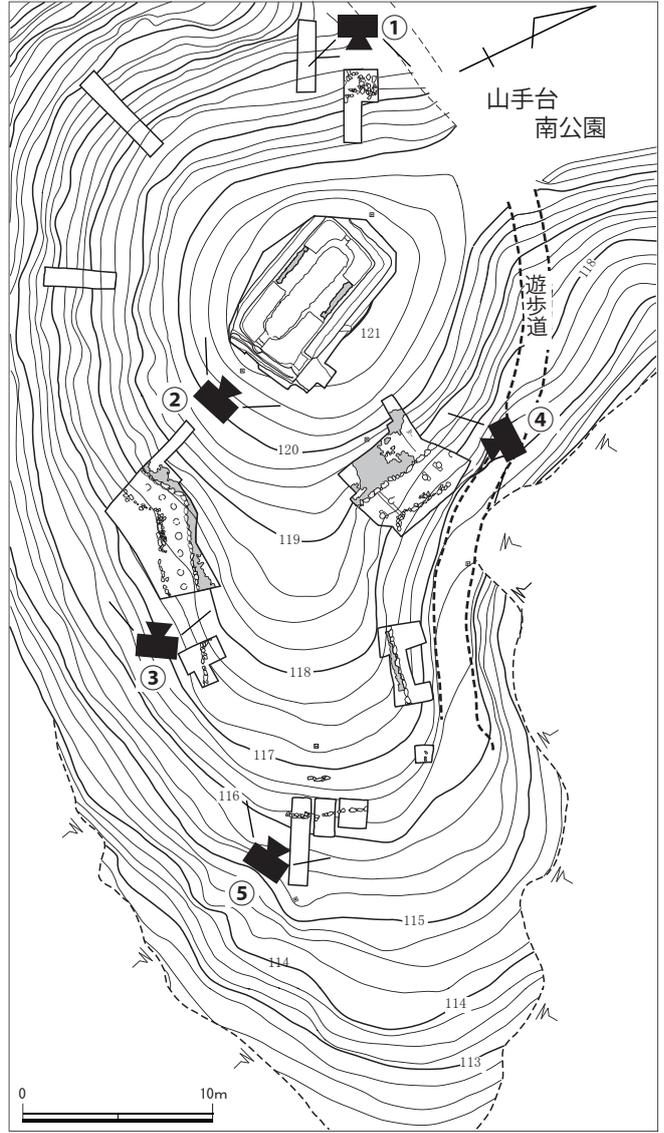
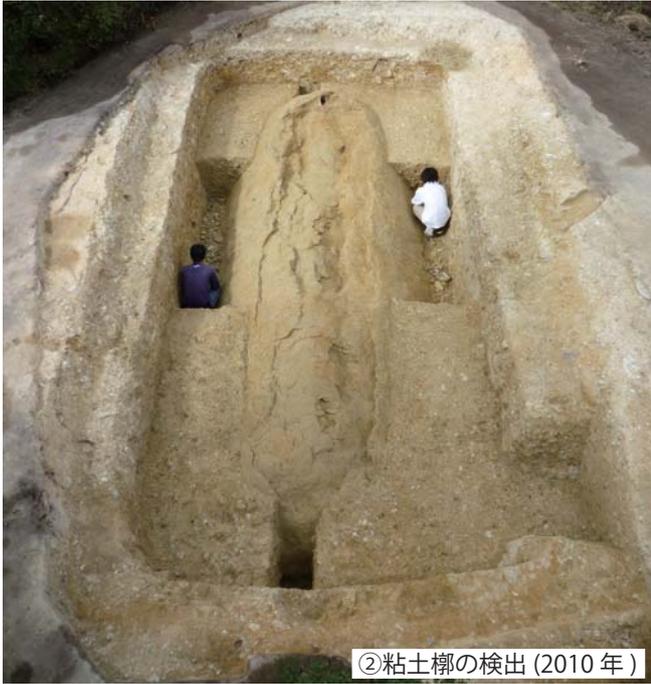
（調査区2カ所、調査面積合計27㎡）

調査期間：2011年9月1日～9月30日（予定）



長尾山古墳の調査区と墳丘復元図

これまでの調査成果



後円部2011調査区の成果

後円部 2011 調査区は、後円部北側における墳丘裾の位置を確定させることを目的として南北 4.0m、東西 1.4mの範囲に設定した調査区です。

調査の結果、墳丘 2 段目斜面の葺石、および 1 段目テラス面を良好な状態で検出しました。葺石基底石は標高約 118.2m の位置に、長径 20 ～ 50cm の大きな石を横使いして置いています。検出された位置が、昨年度に想定していた墳丘 2 段目の復元ラインよりも約 1 m 北側であったことから、後円部は、正円ではなく、北側にやや膨らむ不整形であることが新たに判明しました。基底石より上では、主に長径 10 ～ 30cm ほどの石を斜面につきさすように下から葺き、長い斜面を形成していることが確認されました。この調査区の所見によって、後円部の大きさがやや大きくなり、墳丘長も 42m となりました。



後円部 2011 調査区 (東から)

1 段目テラス面は、幅約 0.8m を検出しましたが、さらに調査区外の遊歩道の下に広がるものと想定されます。このテラス面では、少量の埴輪片が出土しました。北クビレ部 2010 調査区で確認されたような樹立状態の埴輪列は調査区外にあると推定されます。

1 段目テラス面は、幅約 0.8m を検出しましたが、さらに調査区外の遊歩道の下に広がるものと想定されます。このテラス面では、少量の埴輪片が出土しました。北クビレ部 2010 調査区で確認されたような樹立状態の埴輪列は調査区外にあると推定されます。

墳頂部2011調査区の成果

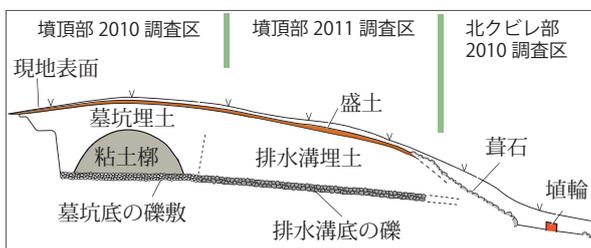


墓坑から東へびる排水溝

墳頂部から北クビレ部にかけて、昨年度検出した墓坑の東南隅に取り付く排水施設の構造を解明するために、東西 6.5m、南北 4m の範囲内に L 字形の調査区を設定しました。

調査の結果、墓坑東南隅から排水溝が北クビレ部の方向に長さ約 6 m 以上のびていることを確認しました。溝は断面 V 字形を呈しており、墓坑への取り付け部付近では上面幅 1.4m、深さ 1.5m 以上の規模です。粘土槲の下の礫敷きにたまった水を東側へ排水する機能を持っていたと考えられます。排水溝は底部に長径 15 ～ 30cm ほどの礫を充填し、その上を砂質土で埋めた暗渠構造となっています。排水溝は北クビレ部の方向に確認されていますが、層位的には墳丘 2 段目斜面の葺石の下にもぐり込んでいることからみて、排水溝を砂質土で埋めた後に、さらに上部に盛土を行いながら墳丘を整えて葺石を施し、古墳を完成させたものと推定できます。

排水溝の出口、つまり水が最終的にどこに排出されたのかという点は、葺石の現状保存を優先させたために、今回の調査では確認できませんでした。ただ、北クビレ部に近い後円部 2 段目斜面の葺石のなかに、一部不自然に折り重なったように見える部分があることから、ここが排水溝の出口となる可能性も考えられます。



排水溝と粘土槲の関係 (断面模式図)

調査成果のまとめと意義

① 排水施設の構造を把握

長尾山古墳の埋葬施設には、墓坑東南隅から北クビレ部にのびる長さ6m以上の排水溝が取り付くことがわかりました。排水溝は、墓坑取り付き部で上面幅1.4m、深さ1.5m以上を測る断面V字形のもので、地山を深く掘り込んで底に礫を敷き、上部を砂質土で充填した暗渠構造となっています。

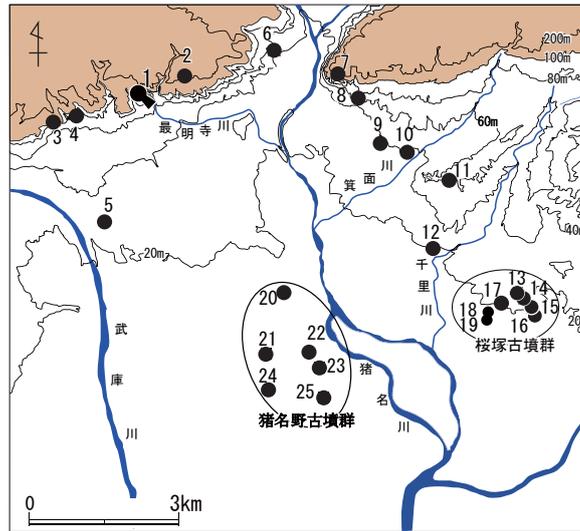
本格的な排水施設を備えた巨大な粘土槨の存在は、葺石や円筒埴輪で墳丘を飾るスタイルと合わせて、古墳時代前期の典型的な有力古墳の特徴を備えていることを示しています。最新の古墳づくりの情報や技術をいち早く手に入れた長尾山古墳の被葬者一族は、猪名川流域で最初に大和政権との間に密接な政治関係を結んだ有力豪族と推定されます。

また、排水溝の施工が葺石を葺いて墳丘を完成させる以前の段階で行われたことが明らかとなった点は、前期古墳の築造過程の解明にとって重要な事例を提供したといえます。

② 墳丘形態を正確に把握

後円部 2011 調査区で、非常に残存状況の良い葺石が検出されました。その結果、長尾山古墳の後円部は北側にややふくらむ不整な円形であることがわかりました。これにより、この古墳の墳丘形態がほぼ完全に把握できたとともに、保護すべき遺跡の範囲も明確になりました。

5年にわたる調査によって、長尾山古墳がこの猪名川流域における最初期の古墳であることが明らかとなりました。長尾山古墳が築かれた古墳時代前期には、長尾山丘陵をはじめ猪名川流域の各地で前方後円墳が築かれています。しかし、中期（5世紀）には長尾山丘陵では有力古墳の築造が途絶え、再び前方後円墳が出現するのは後期（6世紀）の川西市勝福寺古墳を待たねばなりません。私たちは、こうした特徴的な猪名川流域の有力豪族の動向を手がかりに、列島の古墳時代史の大きな動きを復元する研究を引き続き進めたいと考えています。



- 1 長尾山古墳
- 2 万頼山古墳
- 3 中山荘園古墳
- 4 中山寺白鳥塚古墳
- 5 安倉高塚古墳
- 6 勝福寺古墳
- 7 娛三堂古墳
- 8 池田茶白山古墳
- 9 鉢塚古墳
- 10 二子塚古墳
- 11 待兼山古墳
- 12 御神山古墳
- 13 豊中大塚古墳
- 14 御獅子塚古墳
- 15 狐塚古墳
- 16 南天平塚古墳
- 17 新免2号墳
- 18 大石塚古墳
- 19 小石塚古墳
- 20 上膳塚古墳跡
- 21 御願塚古墳
- 22 園田大塚古墳
- 23 南清水古墳
- 24 池田山古墳
- 25 御園古墳

地区 時期	豊中台地	池田	長尾山丘陵	待兼山丘陵	猪名野
前 期	大石塚 76+ 小石塚 49 嫁廻塚 30	池田茶白山62 娛三堂27	長尾山 42 万頼山 54	待兼山 御神山	上膳塚 70 池田山 71
中 期	豊中大塚 56 御獅子塚 55 狐塚 北天平塚 南天平塚				御願塚 52 御園 60 南清水 46
後 期	新免2号 23	二子塚 45 鉢塚 40	勝福寺 40		園田大塚山 44

(白抜きは墳形や時期が未確定・古墳名の後の数値は墳長(m)を示す)

猪名川流域における有力古墳の分布図と変遷

調査にあたっては山手台東自治会、小浜自治会、里山整備活動グループ「櫻守の会」、阪急不動産株式会社山手台開発事業部のお世話になりました。末筆ながら記して感謝の意を表します。

日々の発掘調査成果は、HPで発信しています。

HP: <http://www.let.osaka-u.ac.jp/kouko/index.html>